



TITLE:

樽前山噴炎歴史

AUTHOR(S):

田中[館], 秀三

---

CITATION:

田中[館], 秀三. 樽前山噴炎歴史. 地球 1926, 6(6): 405-412

ISSUE DATE:

1926-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183202>

RIGHT:

# 樽前山噴火歴史

圖版第六版付

田中館秀三

樽前火山上のドームは回春火山 Rejuvenated Volcano なることは小藤博士が大正六年の東洋學藝雜誌に説かれた所である。こゝに此説をなほ仔細に吟味したいと思ふ。

先づ此火山の噴火の歴史を迫るが、それには河野常吉氏から材料を澤山得たことをこゝに記しておきたい。

寛文七年八月（一六六七）津輕秘鑑に松前山崩れ其響き當國に聞ゆとあるのは樽前山の噴火であるかどうかわからない。

元文四年七月一日（一七三九年八月一九日）の樽前噴火については同火山活動の状態と思はるゝ記事が松前年々記に見らるゝ。

文化中（一八〇四—一八一八）山頂發炎云々である北游乗の記事を日本噴火志には除きあるもこれ後節のアイヌの談に照せば眞であらう。そ

樽前山噴火歴史

して其時の噴火も恐らく後に記する明治七年の噴火の大規模のものであつたと察せらるゝ。

慶應三年初秋の噴火。仙臺市に眞山孫三郎とて本年九十歳の老人が居るこの人は文久三年及慶應三年の二回白老の伊達陣屋に守備として滞在した、就中慶應三年には守備隊の主計をつとめ、慶應四年舊七月八日まで同地に居た。當時樽前山は高い所から烟を吹いて居たとのことである。そして同氏は次の如き樽前山の噴火を目撃した。

慶應三年秋の頃だつたと思ふ。夜の十時頃先づ地震を感じた、次に大砲の如き響音をきゝそれから、雷の如き轟が續いた、それで障子をあけて樽前山を見ると丁度井戸からでも火柱がはき出さるゝ様であつた。その火柱の上に暗黒なる烟がひろがりてそれが空に棚引き追々薄くな

つた。しばらくして灰が降つた、翌朝になりて灰や、岩屑がつもりて白老では三寸位となつて居たが噴火は殆ど平靜となつて居た。

盛んに噴火して居るとき、そここのアイヌは神を拜み始めた。これは以前にも樽前山は噴火したことがあり、その時輕石降り、積ること一丈、アイヌ小屋は埋つたといふことである、それでその難をさくするため神にいのつたのであつた。(後述する日野氏の談の昔の噴火時と符合す。)

明治四年二月二五日(一八七二)に噴火したといふことは最上喜平といふ膽振國勇拂郡樽前村字別々の人によりて明治四二年大井上氏に物語られた。

この噴火は明治七年二月八日の噴火と同一のものでないかとこれを記した大井上氏自身も疑ひ、それを日本噴火志上編に轉載された大森房吉博士も疑はれて居る。私自身はこの噴火を否定するのである。

この明治四年二月二五日といふのは恐らく

舊曆明治六年二月二五日の間違ではなからうか、そうすればそれは陽曆の明治七年二月八日頃となるであらう、それで恐らく最上喜平氏は二年丈けの記憶違をしたのではあるまいか。何故に私はかく主張するかと云へば次の理由によるのである。

現今白老村居住の木村岩太郎氏は明治五年に初めて苦小牧に来て爾來引續き此地方に居住せる人なるが、最上喜平氏は此人より遅く此地方に移住せる事を主張して居る、又明治四年六月白老に來り今カル、ス温泉に住する今年六九歳になる日野翁にたゞした。同翁によれば明治四年は白老に移住し尤も記念すべき年なるが、その年に噴火のあつたことをきかず又實見せる覺もないといつて居る。また明治四年二月二五日よりの噴火の記事なるものは明治七年二月八日より始まつた噴火記事と頗る似て居る。而して日野氏は明治七年噴火前まで山上の小丘は存在してゐたと主張するから、それが最上氏の明治四年の噴火のとき山上の小丘は大部分破壊し

たといふ談話と相容れない。それで何れを眞とし偽とすることも出来ないが、最上氏の記憶違とせば共に眞となる。

そして又明治四年の噴火はもし最上氏の語る様なものであつたなら、開拓使の文書に残りて居る筈であるが、残りて居ない所を見るもこの噴火のありしといふことは疑はるゝのである。

以上の事實から私は明治四年一月二十五日の噴火を否定し、最上氏の談は二年間の記憶の誤りから來たものであることを斷定する。この最上氏の記事と日野氏の説話とを同事件だとすれば、山上の記載は正確に吾人に明治七年噴火前の模様を物語る。今その當時のことをこゝに更に系統だてゝ記載して見たい。

當時は樽前山頂に中央火口丘があり、それは緩斜せる饅頭狀の小丘であつた、それは火口壁の最高所よりも約一〇米も高かつた、そして此小丘の西方に噴氣孔が數箇あり、絶えず噴孔に硫黄を昇華して居た。東方には噴氣孔はなきも硫黄鑛は多量に存在して居たので、函館山田文

右衛門なるもの其硫黄を採掘し、牛背を以て山頂より樽前村に運んだことがあつた。

この記事から私は次のことを推論したい。中央火口丘は今の外輪山の最高點東山と比較して一〇米高かつたのではない、何故なればかくの如き高さの中央火口丘即ち現今のものよりも大なるドームはその當時存在してそれは飛きとばされたことは今のドームを抱いて居る中央火山の構造と、火口原に散在して居る熔岩塊から推し得られぬ所であり、又河野常吉氏は私のために明治以前の紀行文や山のスケッチを調べられなければ、明治七年前に今の如きドームは中央火口丘として存在して居たことは想像されぬといふことである、然し中央火山の高かつたことは、どの記録によるも、又老人の記憶によるも確かである、恐らくその高かつた中央火山の火口の内部にその火口壁より約一〇米高いドームがあつたのであらう。丁度北海道駒ヶ嶽の爆發火口中に安政年間成生のドームの存在して居るやうに。

この小丘の性質は、岩層山であつたらうか、ドームであつたらうか、又は火口をもつて居る小火山であつたらうかといふ問題になるが、色々の記事から見れば、頂上に噴火口があつて噴火をして居たといふことはいつてない。たゞ西方からの噴氣は盛んであつたやうである。これは現今のドームの西側からも噴氣が盛に行はれると似て居る。又東側には硫黄礦が多量に存在したといふが、それは如何なる種類の硫黄であつたかは判然せぬが、今のドームについて見れば活動の中心は大正九年にはドームの東麓の裂隙、大正一〇年頃にはドームの東肩に新に出来た新火口、そして現今はその火口の西に接した裂隙である。であるから現在の西と東とにある噴氣口の位置は明治初年まで存在した火口丘の硫黄を噴出せる噴氣口に相當したものではなからうか。

今此硫黄礦が多量に存在したといふことを他の北海道の例で吟味して見る。

火山丘の邊に硫黄を蓄積して居るのに二つの

標式がある。一つはアトサノボリの丁度麓部即ちアトリオの部分に多量に蓄積されて居るやうな硫黄で、火山丘の麓の噴氣口活動を物語るものである。アトサノボリのは近年まで稼業されつゝあつた。又惠山の麓部の爆發火口からも現今硫黄は盛に噴出して居り、近い過去までこの噴氣より硫黄を採集しつゝあつた。これは火口丘の周圍から硫黄を噴出する標式であるが共にこの二つの火山丘は圓頂丘(ドーム)である。

他の標式は前者の如くドームの麓に硫黄は噴出するが、それは火山丘と外輪山の間の部分、又は側方の爆發口に水が溜りて居るためその水中に硫黄は沈澱し、所謂沈澱硫黄を形成し又はしつゝあるので、その例は岩雄登と登別温泉湯沼で見らるゝ。

一體火口から硫黄が噴氣することは硫黄が大氣中に逸散することである。然るに熔岩のドームが生ずれば火口に栓をしたやうなものである。そして硫黄瓦斯の基來する火山の中軸部から最も地表に近い點即ち爆發しやすい點の軌跡

はドームの麓を廻る圓であるからドーム成生以後の爆發口はこの部分に於てすることは多い、又ドームの上に裂隙がない時は、噴氣口も多くこの麓部に生ずるわけである。これが硫黄礦床はドームと關係した場合は多くその麓部に存在する理由であると思ふ。なほ南米アンデス火山地方の硫黄礦もドームと關係して居ることが多いのも以上の理に外ならぬと思ふ。斯様なことから明治初年に樽前山上に存在して居た火山丘を熔岩よりなるドームであつたらうと推することは理由のないことではないと信ずる。

日野翁は明治七年一月より土人を従へ社臺へ鹿狩に行つて居たのであつた、それで二月八日の噴火を實見することが出来た、その語る所は次の如くである。

明治七年の始め頃から樽前山の烟は常になく少なくなつたので噴火するやも知れぬと噂するものもあつた。當時アイヌの物語りには五―六〇年前の噴火の際（明治初年より五―六〇年前

といふは文化年間の噴火を指すものと思はるゝ）降灰甚だしく、井戸水は灰の爲め濁つたことあれば、樽前山の噴火のときは井戸に蓋をして橋下に逃げよといふことを教へてくれた。そして二月八日に噴火したのである。時計は持たなかつたが噴火の時刻は午前八時頃と記憶して居る。その第一の噴火の瞬間社臺村から白老村に行く途中であつたが前述のアイヌの注意を想起し附近にある井戸に蓋をして途中の橋の下にかくれたが、二時間を経て危険なかりし故白老に歸つた。

此噴火の時間は木村氏は午後二時頃といひ、苦小牧村役場では午前十一時と云つて居る。

噴火は山上のドームの南方海に向つて眞直に抜けたる故樽前村錦多布村落の間に灰をふらせた。そして灰はその邊に一尺五寸位つもり、なほ烟は遠く海上を覆ふた、又この烟は南東に擴がりて日高方面にも及び、灰砂の降下せる所は海面は見ぬ程であつた、又風上の南西には降

灰は僅少であつたとのことである。

なほその夜白老に歸つたが、山上には遠方から見て火の柱は二丈位高く上り、又一丈立方位の火のやうな大石が吹きとばされて中空に上がり、それは山腹をころげ落ち、その壯觀は言語に絶した。そして此時の噴火にくらべると明治四二年のドーム噴出前の爆發は物の數ならぬ程小なるものであつたとのことである。

此噴火の様子は船越長善といふ人によりてスケッチをされてある。このスケッチは明治七年二月八日午前七時及午後八時札幌(幌)道廳より遠望せるもの各一、同九日午後二時イサリ村より遠望せるもの一、同午後八時千歳より遠望せるもの一、同一〇時午後四時二〇分苦細(苦小牧)驛より噴火鎮定の狀を一望せるもの一、明治七年二月一二日札幌本廳より破裂後の遠望圖一、合計六枚外に樽前山附近の地形圖一枚が合せて一冊の折本になつて居る、その一つをここに御紹介する。(圖版第六版參照)

この人は恐らく噴火調査に派遣されて九日より千歳苦小牧へ出張し一二日まで歸札し、その前後途中をスケッチしたものと思はるゝ、これによりても噴火の強大なりしことゝ、黒烟の間に電光の現出されたことは明である。換言すれば此噴火の際は二月八日より三日間は黒烟上り、降灰あり、その後鳴動あり、又同月一六日に又爆發をしたものやうである。

此噴火によりてドームは大部分飛散してその位置に火口が生じた、木村氏の話によると周圍三〇〇間位、直徑一〇〇間位の火口が出来て其火口底の平な面から一面に噴氣をして居たといふことである、なほ火口原の南に偏在してあつた水溜は消失したと云ふが、それは破片的の抛出物で埋つたのであらう、又その附近空澤の上には長き裂隙が形成し、その裂目は狭き所で五、六寸、廣い所で三、四尺あつたといふことである。

明治一六年十一月五日(一八八三、一一、五)

の噴火につきて札幌沿革史に見ゆる記事の外に私の手もとに白老郡山林監手富士源治氏が勸業課山林係御中として差出した報告書がある。

これには山の鳥瞰圖が添付してある、このスケッチには明治四二年噴出のドームの位置に火口があり、其南縁に近い所、即ち今の私の所謂オールドフェースフル裂隙火口の所に小山を現出し、又西山の麓と今のドームとの間の火口原に當り、ドームの方に偏して畧南北に向ふ長さ三〇間巾三間の裂隙がかいてある。又日野氏はこの噴火後頂上の中央が少しく低くなつたやうであるといつて居るが、それは今のドームを其火口中に有せる中央火山が上部幾部分かを吹き飛ばされたためではなからうか。報告書にかきある文句の必要な部分は次の通りである。

一月五日午後二時頃、樽前嶽吹出し白老村より東の方へ灰計降候と被存候、尤も先年貫け出し穴の縁に長三〇間程、高さ一二—一三間餘り盛出來、後盛よりも吹出候様に見請候山林へは

差障無之候云々。

又勇拂郡役所の報告に同噴火のスケッチが附してあり、それには支笏湖々畔の方に大石が噴出されて居る。

私は往年大森博士と樽前山に北東の方面から登山した時、その途中山腹に澤山の徑三米もあらうと思はるゝ大きなバン皮狀の火山彈を見たことがある。この熔岩彈は恐らくこの噴火のときに落下したのではなからうか。

記録によればなほ此噴火後、明治四二年の噴火までの間次の年月に活動した。

明治一八年一月四日。

明治一九年四月一三日、一五日、一六日、二

八日。

明治二〇年九月三日、一〇月七日。

明治二七年八月一七日。

これ等の記事を吟味するに皆噴烟あり、或は南に東に東北に灰を降らせたとのである。

これ等噴火の際山上に起つた地形の變化につ



いては更に知る由もないが、前記の中央火口南縁の小丘と、西方火口原上の裂隙はその後影をさめざるに至つたらしい。これ明治四二年三月三〇日の大爆發の後大井上氏の山上のスケッチにはこれ等のものは記してないからである。

明治四二年ドーム噴出の状態及其後の経過につきては已に大井上氏の詳細なる記事があり、又大森博士、私のかいたものがあるからこゝには畧する。

要するに樽前山上には何時の頃成生したか知れぬが明治の初年中央火口内に圓頂丘があつたそれが明治七年の爆發のとき大部分飛散したのもらしい、そしてその後二・三年で小丘が火口の南縁に成生した。これは明治一五・六年頃までは存在したらしい。

その後幾度もの噴火によりて、火口内及周囲の小丘などは取去られ、そして明治四二年に大規模のドームが出来た。

現今はこの圓頂丘の破壊時代である。

此の如く一度あつた圓頂丘は破壊し去り、再びそれが回春した例は少なくない、就中アリユーシアンンのボゴスロフ火山に於ては一九〇六年三月メトカルフ丘が出来た、其高さ四〇〇尺、その徑二〇〇〇尺あつた。其生命僅かに十ヶ月で同年一・一二月の頃爆破し去つた。そしてその年の一二月またその爆破のあとにマツクロクホ丘は生れた、其高さ四五〇尺、その徑二〇〇〇尺に達したが、其生命僅かに十ヶ月で一九〇七年九月一日遂に又爆破した。

樽前山上のドームはこれと共に回春火山の好例である。